

傷痕

高橋玄洋

放送日 昭和35年11月20日
番組名 サンデー劇場
制作 NETテレビ
（日本電気・新日本電気）
演出 山本隆則
音楽 斎藤一郎

登場人物

津村 省造 森 雅之
柳田 謙一 伊藤 孝雄
母 つぎ 沢村 貞子
南田 専務 柳 永二郎
高梨 常務 河野 秋武
福永 〃 若宮忠三郎
石田 〃 遠藤 慎吉
本橋総務部長 御橋 公
柿沼業務 〃 清水 一郎
栗本人事課長 松村 達雄

楠 朝子 高田 敏江
父 倉吉 浅野進治郎
母 いち 鈴木 光枝
安部 光子 柏 正子
川 端 北町 史朗
矢代 宮川 洋一
斉木 平沢公太郎
学生 川口 藤田 尚
〃 〃 中谷 八木 侃
吉村 裕久

1 オフィスの窓・窓・窓

2 控室

入り口に「受験者控室」の貼り紙。

室内には、面接を待つ十数人の学生。落着いているのや、そわそわしているのや、文庫本を開いているのや、いろいろ――

人事部員、川端が点呼をとっている。

部員（続きで）川口君。

川口 ハイ。

部員 中谷君。

中谷 ハッ。

部員 吉村君。

吉村 ハイ。

部員 牧野君。

牧野 ハーイ。

部員 島田君……。島田君！ いませんか？（あたりを見廻し、名簿にチェックする）

柳田君。

謙一 ハイ。

部員 大山君。

大山 ハッ。

部員 もうじき面接です。

人事部員、去る。

柳田謙一、立上って廊下へ出る。

3 廊下

控室から出て来る謙一――

控室の前で津村業務部次長とすれ違う。

経理部員Aが津村を追って来て――

A 津村次長……。それから先日の予備費の件ですが、（小声の立ち話しになる――）

謙一、「津村」という呼び名にハッとして振り向く。

津村、話しを終えて歩き出す。

謙一にフオロウして――

4 洗面所

謙一、入って来て鏡の前に立つ。

頭髮に櫛を入れる。

鏡面。

右額の傷痕が、はっきりと映る。

謙一、沈んだ顔になり、傷が目立たぬように、櫛で髪を前にすく。

だが、傷は隠れない。謙一、自分の弱気に反撥して、又髪を元に直し、挑むように

凝視。

その顔をタイトルバックに――

5 メインタイトル

スタッフ、キャストと続いて――

6 会議室

川口。

南田 (声) 君はどうして特に本社を選んだのです？

川口 (流暢に) ハイ、貿易事業は、直接わが国の発展に影響を持つ重要な仕事で……

現下の輸出入のバランスから云って……。

南田 なぜ特に本社を、と聞いているんですよ。

川口 ハイ、松方商事は……業界でも特に堅実な歩みを続けてこられ……とりわけ終戦

後の、進駐軍による解体命令の時に、商品部門別・地域別に整然と分散して他日統合の日にお備えになったことは、先見の明があったと敬服しています。

南田 ほう、なかなかよく調べてきたね。

油汗をぬぐう川口。

(WIPE)

中谷。

福永 失礼だが、君のその頭、天然パーマ？ それともかけてるの？

中谷 天然です……祖母から貰ったらしいんです。

福永 お祖母さん、困ったやろな、丸髷で天然パーマじゃ……。

南田の声 お父さんには出てないがねえ。

(WIPE)

吉村。

福永 あの大学やったら、君、革新党ひいきやろ？

吉村 いえ……保守党です。

高梨 なぜかね？

吉村 保守党には、ソノ……現在あるものの中からよいものを見出してこれを守ろうとする精神と、それを更に発展させようとする思想がありますから。

石田の声 ヤマが当たってよかったね。

吉村 い、いえ、体質的に僕は……保守党のほうが……。

高梨 (かぶせて) 君ぐらいの年で……保守党支持というのは、一寸おかしいがねえ。

吉村 (むきに) いえ、ぼ、ぼくはそう思いません。

会議室の俯瞰。

吉村、一礼して去る。

柳田謙一の採点表。

栗本の声 え……柳田謙一、二十三才……城北大学商学部……学力90点、常識92点、身体検査優、一次面接A'。

南田 学力は最高だね。

石田 A'は残さんと云う方針だったろう。
福永 なんの為のルールや。

栗本 実は、この男、顔に傷があるんです。顔の傷が採点に影響していいか、どうか、一次面接でも大分議論がありました……一応ダッシュを付けて通したんですが。

本橋 一次で落すのも可哀そうでしたらねエ。

高梨 映画のニューフェースの試験じゃなし、顔の傷なんか問題にならないと思う。

津村 (遠慮がちに) 賛成です。

石田 しかし、わが社は貿易会社だからね。まあポストにもよるが、外国行きとか、外人に接する場合を考えると、そう軽卒には、君イ……。

福永 おもしろいやないか。切られの与三のバイヤーいうのも。

南田 (にがにがしく) 困るねえ、そういう無責任な発言は。

栗本 ええ、この傷痕については、興信所の調査報告でも取上げておりますんですが……(書類をめくって読む) 本人は右上額部……この辺です。刀傷と思われるかなり顕著な傷跡を残しているが、これが何によるものかは本人も語りたがらぬふうで、現住居付近の聞込みに於ても、詳かでない、従って再調査の必要を痛感致します。

石田 がめついねえ、興信所というやつは、再調査して又金をとる算段だ。

南田 で再調査は……頼んだのかね？

栗本 依頼してありますが……まだ……。

福永 今日の間に関わんけりや、仕様ないやないか、(書類をのぞいていたが) あ、君……社内知人、津村省造……。

津村 えッ？

福永 そんならそれと、はよ云わんかいな。

津村 何と書いてあるんです？

栗本 津村省造……関係、母の知人……。

本橋 (微笑——) お安くないねえ津村君……。

津村 ……栗本さん、ちよつと……。(書類を借りる)

津村、凝ッと書類を見詰めて思い出そうと努める。

石田 覚えがないのか？ それでは、コネとは云えんね。

福永 結婚して姓が変わったんや、津村君とはつまり……、娘の頃の知り合いやろ、罪な男や。

(皆、笑う)

南田 じゃあ、君……。

川端 はい。

川端、出て行く。

津村、注意ぶかく書類をしらべる。他の者は、やがて現われる学生の額の傷に期待を集めて、好奇の眼を入口にむける。

柳田謙一、入ってくる。

集中する視線を避けて顔をやや右へ振りかげんにしているのは、長い間の習性である。

栗本 お掛けなさい。

謙一、掛ける。

栗本 柳田謙一君ですね。

謙一 ハイ。

栗本 出生地は何処です？

謙一 静岡県の鷹岡です。

南田 あ、富士の見える良い処ですね。

謙一 ハイ。

南田 あなたが、本社の幹部になったとして、輸出の振興をどういう風に計りますか、簡単でいいです。

謙一 輸出の振興と云つても、必ずしも輸出量を殖やしてドルの保有を図るだけではないと思います。

津村が見ている興信所の調査報告の一節――

南田（声） というと？

「……太平洋戦争で父を失い三十二年春に城北大学に入学いらい数回転居ののち母を呼び迎えて現在に至る。現住所は届け出で通りなるも、間借。資産殆んど無く翻訳下請等のアルバイトで学資をまかない……」

謙一（声） 輸出が増大して輸入を遙かに上回ると云うことは、それだけ相手方では輸入超過になっているわけですから早晩取引は行き詰まることになります……。要は輸出入のバランスをとつて、貿易量を増大さすことです。その為に相

手方の信用獲得が第一だと思います。

次の頁ををめくろうとする時――

向い側の席から高梨の手がのびる。津村、書類を渡し、謙一を見つめる。

机上のメモ用紙。鉛筆が走り、謙一の顔の似顔が画かれる――石田である。

石田（画きながら） その、信用を獲得する方法は？

謙一 それは、商業道德を守ること、確かに必要ですが、第一に相手の品を買ってやることです。相手方のいいお得意になることだと思えます。

福永 ほう。こら卓見や、お得意になることでねえ、成程……輸入部にはええこと云うてくれはる。

高梨（書類を見ながら） 君が入社したら、お母さんは扶養家族ちゆうことになりますな。

謙一 はい、お願いしたいと思います。

本橋 本社へ入社を希望された理由は？

謙一 父が生前、貿易関係の仕事をやっておりましたし……母も、是非と希望しますの

で。

本橋 ほう、お母さんがね……。

石田（大声で） ……ううむ、……警視総監賞とあるね？ 履歴書の方には……無い、

これ、どういうの？

謙一 ……。

石田 え、どういの？

謙一 (控え目に) 人命救助です。

石田 それだけじゃわからんね。(キザなアクセントで) ……ホエン？ ホワット？ ホヤ？ ホワイ…………？

高梨 (にがにがしく、反撥的に) 水かね？ それとも、火かね？

石田 (高梨をじろりと睨み) いつ。何処で？

謙一 申し上げないといけないでしょうか。

石田 (やや皮肉に) 履歴書に書いてないのは、謙譲の精神からだろうが………… (足を組んで)

謙一 一応有利な条件じゃないか、云い給えよ。

謙一 偶然、火事場に来合わせたものですから…………。

南田 何処です、それは？ 助けた相手は？

謙一 近所のアパートの火事で…………子供です。

高梨 履歴書に何故書かなかったの？

南田 今どきの若い人は、警察から表彰されることを敢て恥としとるのかな。

謙一 そんなことはありません。

南田 そうだろうね。全学連じゃないんだから…………。それとも一時やった？

謙一 そんな暇はありませんでした。

本橋 暇があったらやった？

謙一 いいえ。

南田 いや、うちは全学連でも構わんのだよ、ファイトは、一種の才能だからな。

謙一 (苦笑——)

栗本 じゃ、ほかになければ、控え室で待って下さい。

謙一 謙一、一礼して行きかける。

高梨 君、もう一つだけ…………(立上り) 失礼だけれど、君のその右額の傷は…………。

謙一 ……。

南田 高梨君、もういいじゃないか。

高梨 いやなら答えなくてもいいんだよ…………(真摯に) 失敬だが…………吾々はみんな君を見て、その傷跡が気になる、けれども聞きにくい事だから誰も触れない…………どうした傷？ 刃物ですか？

謙一 ……ガラスです。

高梨 (切り込んで) 火事で人を助けた時の？

謙一 (くるしそうに) ハイ。

高梨 ありがとう！

謙一 謙一、去る。

石田 成程ねえ。…………高梨君は、弁護士になった方が出世してたんじゃないか？ ハ、ハハ。(だが、誰も笑わない)

津村 (立って) ちよっと失礼します。

津村、出て行く。

南田 (声) 次…………。

7 廊下

ひっそりとしている。

津村、前を行く謙一を追う。

津村 (追いついて) 君……。

謙一 ……？

津村 君、ぼくを知ってるかね。

謙一 (さっき此の廊下での一瞥を思い出す) いいえ……。

津村 ぼくは業務部次長の津村省三だがね……。

謙一 (俯向く)

津村 君のお母さんがぼくを御存知なんだそうだが……お母さんの名前は？

謙一 ……柳田つぎです。

津村 旧姓は？ つまり結婚前の……。

謙一 ……三枝です……。

津村 三枝？……お母さんはぼくをどこで知ってるといってたんです？

謙一 ……或いは知らないのかも知れません。

津村 それじゃ、君、まるで騙りじゃないか、文書偽造だぜ。

謙一 母は……。(云いかけて) 縁故がないと……やはり駄目なんでしょうか？

津村 (勢いをそがれて) そ、そんなことないよ……いや、ないだろうと思う……しかし知りもしない人間の名を騙ったとなると、こりや、問題だからね……。

謙一 母によく聞いて見ます。

津村 君のおかげで、あやうく恥をかくところだった。

謙一 (素直に) すみません。

ロビーから、航空会社のバッグを提げたスマートな若者――

ロンドン帰りの矢代が、二、三人に取囲まれるようにして歩いて来る。

矢代 (なつかしそうに) 課長！

津村 ……？

矢代 矢代です。ロンドン支社の……。

津村 やあ……。

男 1 君、次長だよ、業務部次長だよ、津村さんは今は……。

矢代 あっ、失礼しました。なにしろ霧の都に島流しにされたもんでボウツとしちゃつて……また宣敷くお願いします。

津村 そうですか、……おめでどう！

(握手――)

矢代、男達に囲まれて、総務部の室へ入る。

SE――扉の内部で、歓声と拍手。

取り残されたように佇む、津村と謙一。津村、いたわるように謙一の肩をたたいて、ロビーの方を目で示し、歩き出す。

フロロウして――

隅の椅子。

二人、掛ける。

津村 (諭すように) 君ね、就職試験といえど……人生のスタート・ラインだ……スタートからそんな姑息なトリックを使うようじゃ、将来が思いやられるというもんだよ。

謙一、顔をあげて津村を見る、ありありと絶望の色――

面接を終わった学生大山が、廊下から戻って来て、ちらりと二人のほうを見てうらやましそうな顔――

大山の控室へ入るのを待って、

津村 もし僕の思い違いか、或いは度忘れしてるんだったら……素直に謝るよ……お母さんによく確かめて見たらどうかね。

謙一 はい。

謙一、うなずいて、悄然と歩きます。

津村 柳田君……。

謙一 (立ちどまるが、振り返らない)

津村 (歩いて行って) そんなに、この会社に入りたいかね。

謙一 (やや毅然と) でなければ、受験しません。

津村 そうだったね……失敬々々。

謙一 もういいんですか。(行きかける)

津村 お母さんはうちに居るの？

謙一 (ずばりと) このビルで働いています。

津村 え？(息をのむ)

謙一 あの人たちの仲間です。

謙一の指さす方へ――カメラ、パンして――

ロビーのはずれで棒雑巾を使っている女二人。

(ロング)

謙一 (声) この清掃を請負っている「共栄社」の掃除婦です。

カメラ、戻って――

津村 ああ、それでお母さんが……。

謙一 (間――津村の無言の顔を見てやや捨て鉢に) やはり、母の職業も関係するんですか？

津村 ……君の実力次第だよ……いや、引きとめて済まなかった。

謙一、控室のほうへ。

津村、廊下を戻ろうとして、もう一度振り返る。

(OL)

9 控室

女の子が学生たちに折詰弁当を配布している。

川端が入って来る。

女の子たちが去る。

川端 御苦労さまでした。食事を済ませて……五時にもう一度お集り下さい。

川端、去る。

他の学生たち出て行き、中谷と謙一だけが残る。

中谷 君、コネあるの？

謙一 (首をふる)

中谷 じゃ、予備面接なし？へえ、優秀なんだなあ……(ホット安心——)僕は、親父がここの専務ほら真ん中に坐ってたロマンズグレーの……あの専務とポン友なんだけど、今ここに居た奴は、社長の甥なんだってさ。

謙一 (考え込む——) 興信所って、どの程度しらべるんだろう……。

中谷 (のぞき込んで、にやりとして) やった方？ 派手に……。(スクラム組まね)

謙一 いや、違うんだ。

中谷 興信所員もオーバー労働で、どうせ拙速主義さ……君、コーヒーでも飲みに行かない？

謙一 ええ、ぼくは一寸……。

中谷 (屈伸運動——) くよくよしたって……五時になりや、分るんだ、どうにでもしてくれ！

二人、出て行く。

10 廊下

謙一と中谷、現われて左右に別れる。

目の前の廊下を棒雑巾を提げて母のつぎが通りかかる。

つぎ ……。(小声で) ど、どうだったい。お前……。

謙一 母さん……。

つぎ ……。(目くばせ——)

謙一 大丈夫だよ……誰もいやしない。

11 非常階段の上

二人、現われる。

つぎ ……。(小声で) ど、どうだったい。お前……。

謙一 ……。

つぎ 重役さん、どんなこと聞いた？ うまく答えられたかい？

謙一 母さん、津村なんて人、知りやしないんじゃないか。

つぎ えっ？ (おびえる)

謙一 津村って業務次長、母さんなんか知らないってさ。

つぎ そ……：そ……うかい。

謙一 (目をそらし) まあいいさ、どっちにしたって同じなんだ！ 何だい、こんな会社……。

つぎ お前、短気を起こしたんじゃないだろうね。

謙一 (苦笑) 短気どころか……お蔭でこてんこてんさ。

つぎ (無邪気に、悲しそうに) ……あの次長さんだけは、母さんのこと覚えてくれると思うとったんじゃないけどねえ……。毎朝会うたびに、お早よう御苦労さん、って……。

謙一 (呆れて) なあんだ、それで母さんは…… (見つめる——笑い出す) ハ、ハ、ハ、人がいいなあ母さんは……。

つぎ (おずおず) 次長さんそんなに怒りなすったんかえ？

謙一 いいって言うのにもう……。

(間——)

つぎ でも、まだ駄目と決まったわけじゃないんじやろ？

謙一 (呟くように) 決まったようなものさ……ほとんどコネのあるやつばかりらしいや。(間——) 今年はね、母さん……コネのある奴は前以って予備面接というのを受けて……ほとんどフリーパスなのさ。

SE——遠い汽笛。

つぎ 片親だと……難しいんだってねえ。鷹岡の叔父さんにでも話しをして名儀だけでも養子にして貰ったらどうじやろ。

謙一 (やさしく) いいんだよ、母さん……ここだけが貿易会社じゃなし……なあに、片親だつてどっかしらにや入れるさ……。

つぎ (諦め切れず) だって、折角勤めるんなら……一流でなきや。

途方にくれて佇む母。その肩に手をおく謙一。

つぎ 鷹岡へおいきよ、鷹岡の子になって了いなよ……母さんは……いいから……。

謙一 ……。

晴れ上った秋空。

(OL)

12 業務部

壁の時計。「十一時四十分」

部員は四、五人しかいない。

津村、デスクで電話をかけている。

津村 あ、共栄社？ 松方商事業務部の津村だが……いや、仕事じゃない……あなたの所に柳田って掃除婦のおばさん、居るだろう？ うん……今、居る？ ちよつと会いたいんだがね、済まんが (辺りを見まわして) ……そうだ屋上まで来てもらってくれんかね、うん屋上……。

女事務員が二人、こまかく紙を切っている。

女事務員A 次長さん、掃除の小母さんに御用ですの。

津村 (冗談めかして) 掃除の小母さんだってロマンスの対象にはなるだろう？ ハ、ハ何だね、それは？

女事務員B 今日サンフランシスコ・ジャイアンツがパレードするんです。(紙吹雪をまくまね——)

津村 三階の窓からじゃ、求婚もしてくれんだろうに……。

女事務員B まア……。

津村、笑いながら去る。

見る見る机に山をつくる紙片。

ネオン広告の裏側を背にして――
つぎが恐縮の態で佇む。

かなりの強風が彼女の髪を散らしている。

つぎ 申しわけありませんです。私はもうただ謙一が……一生安心して働ける会社へ入ってくれたらと、それだけを念じて参りました……ところが、今まで受けた会社はどこも……もう一息というところで……。

津村 どうしてかねえ。

つぎ はっきりしないのでございます。きつと……片親で貧乏だとか、顔の傷だとか……。

津村 しかし、そんなことは……。

つぎ と、皆さん仰有います、けれど事実、そうなのでございます。

津村 ……。

つぎ あの子には内緒で、大学の学生課ちゅう処へも掛け合いに参りました、窓口の方も……そんなこと、ない、とおっしゃるんです。じゃ、学科は通るのに何故落ちるんです……私は苦勞して納めた月謝が惜しうなりました、返してくれと……つい怒鳴ってしまいました……。

津村 (溜息) それで、ぼくの名前を使っただね。

つぎ 濟みません……あの子が、知合いがないと入れないって……ヤケみたいにゴロンと転がっているのを見ると……次長さんを母さんよく知ってるから大丈夫だって励まし

につい……本当に悪うございました。

津村 しかし、どうして前もって知らせてくれなかったのかねえ……堂々と推せん者になっただげたのに。

つぎ とんでもない！ 掃除婆が、次長さんに……。

津村 そんなことはない、優秀な人材を入社させるのは、幹部としての義務だからねえ。

つぎ 有難うございます。(深くおじぎして) あの子が受けさせて頂くことになってから、毎日こちらのお便所の掃除を買って出ましたんでございます。毎日お便所を掃除しながらこの母の願いを神様だけは……きつと判って下さるに違いない、そう思っただけで来ました……いいえ、(涙声――) あの子を入れてさえ頂ければ、一生お便所の掃除させて頂きますです……。

津村 (やや僻易しながらも、真情に打たれて) お母さんの気持はよく解りました……。改めて知合いになるう、及ぶ限りの尽力はしますよ。

つぎ ……。(びっくりして見上げる)

津村 (やさしく) だがね、お母さん！ 入社試験ってものは結局のところ矢張り本人の実力で決まるんだよ。……もし謙一君が入社出来たとしたら、それは謙一君自身の力で入ったんだ。いいね、わかりましたね……。

津村の顔に強い決意。

つぎ (よく解らず) ハイ、どうぞ、……およろしく願い致します。

津村 じゃあ……仕事があるから……。

津村、入口の方へ折れる。

その背中に向って、つぎ、合掌する。

14 業務部

栗本人事課長と、柿沼業務部長に向い合って、眼鏡の興信所員、斉木。

津村が戻って来る。

津村 部長、お帰りなさい……。

柿沼 (苦がり切って) お帰りなさいじゃないよ、君……。

津村 はあ？

栗本 津村さん、ほんとに、柳田謙一と知り合いなんですか？

津村 ええ。

柿沼 責任問題だけ、君。……君はその学生が暴行傷害事件の被疑者だったことを承知で推薦したのかい。

津村 (呆然——) 暴行傷害……。

柿沼 ……前科者同様の男さ……。

津村 (ハツとして) じゃあ、あの傷はやつぱり……。

栗本 いや、ガラス傷には間違いないが……(いまいましげに舌打ちして) 君、次長に説明してあげ給え。

斉木 (揉み手して) はッ、何分にも調査期間が短いため報告が延引致しまして、どうも……。なにせ、本人が事件以後、再三転居いたしましたため、聞き込み意外にヒマどりました……。

柿沼 君、前置きは省いて。

津村 しかし、げんに人命救助で警視総監賞を……。

栗本 そこが柳田のトリックなんですよ。巧妙なスリ代えだ……。いいですか、アパートの火事で子供を助けた時の柳田の顔には、既にあの傷があったんですよ。

津村 ……。

斉木 (再調査報告書を差し出し) ここを御覧ねがいます……ええ、そこそこです。

報告書の一部。

「当時本人が単独で、二階借りしていた新宿区訪諏町二二三オリオン堂薬局近辺の雑貨商安部光子の証言に依れば……。」

(OL)

15 オリオン堂薬局の前・深夜

SE——犬の遠吠。

昭和三十五年四月

銭湯帰りの光子、歩いて来る。

光子の声 なまあたたかい、月がボヤッと出ている晩でしたわ……あたしが銭湯の帰りに、遅くオリオン堂さんの店の前を通りかかると……中で大きな声がするもんで……。

光子、立ちどまり、店のガラス戸に寄り中を覗くが、カーテンで見えない。その、そばだてた耳に——

朝子 (声) 離して下さい！ 後生ですから……。

謙一 (声) 駄目だ……静かになさい……。

朝子 (声) 謙一さん……。

謙一 (声) 朝子さん!

光子の眼、怖れと好奇に燃える。

間――

SE――ガチャーンと、もの凄い音、朝子の悲鳴。

倉吉 (朝子の父の声) なにしとるんじゃ、……この馬鹿者ッ!

朝子の泣き声。

男の争う声。

土間で乱れる足音。

光子、電柱の陰にソツと隠れる。

店の潜り戸があく。

倉吉が謙一のえり首を掴むようにして外へ突き出す。

倉吉 (仁王立ち) このバカ野郎! 嫁入り前の娘なんだぞ!

謙一、抵抗しない。

朝子の泣き声、高まる。

倉吉 頭を冷やして来い!

倉吉、引込む。

ぴしゃつと戸が閉まる。

電柱の陰から――

凝視する光子の顔が「あッ」とゆがみ、手を口へ――

月光を浴びて佇立する謙一の、右手で抑えた額から、指を伝って滴り落ちる鮮血――

その顔にOLして、

16 業務部

再調査報告を読み終る津村。

柿沼 娘さんはそのとき抵抗して腕に怪俄までしたんだぜ……あきらかな、暴行未遂じゃないか。

齊木 医者 of 通報で事件は警察沙汰になりましたが、結局は示談が成立しました……こりや当然でしょう。なにしろ嫁入りを一ト月後に控えていたんですからナ。

柿沼 劣情か、失恋からか、どっちにしても危険きわまる逆上型だ。

栗本 津村さんもえらいやつに見込まれましたね。しかし、まア良かった。

柿沼 (腕時計を見て) ぼくは又通産省へ出かけるが津村君、専務達によくお詫びしておく事だね。

柿沼、去る。

津村、さすがに、がつくりと項垂れる。

17 地下の塵芥集積所

大きなホールを通過してビル全体の塵芥が落下してくる。

SE——その落下音。

カメラ引くと——つぎが塵芥を選びわけているそばで、謙一も手伝っている。

つぎ 止しなつたら、お前は、もう松方商事の社員さんなんだけにナ。

謙一 すぐ母さんはそれだ……あの次長だって、当てにはなりやしないよ。

つぎ でも……次長さんよく判って呉れんさったんじゃもの。

謙一 (相変らず暗い顔で) そりゃ、あの人の名前を使ったと云うことだけだよ、それを諒解して呉れただけさ……これ、どっち？

つぎ そっちでいいよ……お前、母さんと次長さんの話しを聞いてなかったから、そんなことを云うんだ……そりゃあ良い人だよ。

SE——鉄の階段を下りて来る靴音。

(その反響——)

つぎ あッ、次長さん……。

謙一も振り向く。

津村、怒気を含んで現われる。

津村 柳田君！ 君は大変な事を隠していたね。

つぎ、おどおどして謙一の顔を見る。

謙一 ……。

津村 いま興信所の再調査報告を見た、あれは……間違いない事実だろうね？

謙一 (しずかに) ……暴行傷害事件ですか？

津村 (その平然たる態度に、ムカツとして) 単なる傷害じゃない……君が下宿先の娘

さんに乱暴して負傷させた事件だ……(云ってしまったから、さすがに気の毒そうにつきを見て) しかも、人命救助と結び付ける……君の醜い傷は、単に顔だけじゃなかったんだね……残念だ。(言い捨てて去ろうとする)

つぎ (立ちふさがって) 待ってください……次長さん、謙一はそんな……(津村にとりすがるように) 間違いです……。何かの間違いです！

謙一 母さん……いいんだよ……。

つぎ 謙一！ (腕をつかみ) お前母さんが田舎から出て来たとき、どうした傷だつて聞いたら……凍った道で滑って……ほら、柵の針金で切ったつて云ったじゃないか……あ、あれはウソだったのかい？

謙一 (顔をそむける)

つぎ 何かの間違いだろう？ 謙一！ 云っておくれ、間違いだねえ……？

津村 謙一君どうなんだ？

——間——

謙一、涙のにじんだ眼で、きっぱりと頷く。

津村 間違いならば……お母さんや私に真相を打ち明ける義務があるぜ。

つぎ 謙一。

謙一 (泳えて) ……母さんやあなたがなんと云おうと、これだけは断じて云えません。

津村 何故だ？

謙一 僕の心が……精神が……許さないんです。それを無理に云わせようというのは暴力ですよ。

津村 そのため、君がうちの会社に入れなくてもか？

謙一 やむを得ません。……ぼくは運命を賭けてるんです。

津村 ……？

(謙一、去ろうとする)

津村 待ちたまえ……君はその娘さんが……本当に好きだったのか？

謙一 (微笑——) そういう御想像は大へん通俗的ですね……。 (踵を返し、去って行く)

鉄階段をスタスタと上って行く靴音。

(その反響——)

黙って肩を傾けて立つ津村とつぎ。

つぎ 次長さん！ 私は信じてます。あれはウソはつかない子です……。

津村 私も、そう信じたいが。

つぎ いいえ、何かわけが有るんです……。 お願いです。もう一度調べて見て下さい。

このままでは……謙一は一生、一生……。

津村 ……。

(黙って腕時計を見て)

つぎ (血を吐くように) お願いします！

津村 よろしい！……調べて見ましょう。

津村、足早に去る。

つぎ、よろよると塵芥の中に坐り込む。

18 ビルの内庭

謙一、一人ぼつねんとやって来る。

19 オリオン堂薬局の奥座敷

むつつりと不機嫌な表情で坐り込んでいる白い上ツ張りの倉吉。

オドオドと伏眼になっている、いち。

対座する津村。

倉吉 さあ、私にやあ何のお話しか、さっぱりわけが判りませんがねえ、そりゃあ、お尋ねの柳田って学生さんが……この二階に下宿していたことは有りますよ。それから何人入れ代ったか、今じゃあ、顔も覚えていませんよ。

津村 ご尤です。しかし、くどいようですが……柳田君がお宅から、引越しをする二、三日前、つまり、おととしの四月十五日の晩に……。

倉吉 (ぶつ切るように) 二年以上も前ですぜ……あたしやあ年のせい、近ごろ健忘症でね……ハ、ハ、ハ。

津村 (あくまで真面目に) その晩、あなたが柳田君に対して大変ご立腹なされたよう
な出来事が……。

倉吉 あたしやあ年中、向ッ腹を立てていますよ、なア……。 (妻を見て笑う)

いち (笑わない)

津村 では、奥さんにお伺いしますが……。

いち (おびえた顔――)

倉吉 しつっこいねえ。(怒鳴る) なんにもないと云ったら無いんだ。興信所や近所のお喋り共がどんなデマを飛ばしたか知らんが、迷惑至極だ。(名刺を指で弾いて) あんたも大会社の次長さんだ、常識つてもものをお持ちでしょう? もうお引取りになって呉れませんか。(――間――) 入社させておやんなさいよ、功德でさあ。(立上る)

倉吉、部屋の外へ。

いち、追って行く。

倉吉、ふり返って、きつい目に物を云わせ、店のほうへ去る。

いち、戻って来て小さく坐る。

いち 頑固な人でして……すみません。

津村 いや……お嬢さまはたしか、朝子さんと仰っしゃいましたね。

いち ハア。

津村 いま、何方へ?

いち ハア、杉並のほうへ片付きました……。

津村 (押す) 杉並の、どちらへ?

いち、急に畳の上に両手をつく。

いち お願いします! あの子の処へはいらっしゃらないで! お願いです……朝子は倅せに暮らしてるんですから……!

津村 (相手の大仰さに面くらって) いや、私は別に……。

いち 過ぎたことでございますから……どうぞもう……。 (涙の目で見上げる)

津村 (感傷に引き込まれまいと自制し) と仰っしゃると、失礼ですが……お嬢さんと

柳田君との間に、何か……恋愛関係というようなものが……? それがこじれて……。

いち いいえ、滅相な、あの子は、無傷で嫁に参りましたんです! (異様な調子――) 無傷で……。(泣き伏す)

津村 (微笑) そうでしょうとも。そんな事を疑ったりはしておりません。私が伺い度いのは、柳田君の当夜の行動の動機なんです。いかがでしょうか。

津村、見つめる。

――間――

いち、蒼白となり、掌で顔を蔽う。

いち (掌の間から、低く、洩れるように) 知りません……わたしも本当の事は知らないんです……ただ、ただ……。

津村 ただ、どうなんです?

いち (絶叫) お帰りになって下さい! (突っ伏す)

――間――

津村、諦める。

津村 では、やむを得ません。(一礼して立上る)

いち (見上げて) どうぞもう……これ以上お調べにならないで……。

津村 (苦笑、棚の置時計を見る。置時計一時二〇分) 調べようにも、もう時間がありませんよ。

津村の視線がふと神棚にうつる。そこに寄せかけた家内安全の護符。

倉吉、いちのと並んで——楠朝子と記した一枚。
津村 お邪魔いたしました。お宅は掛下さんでしたね？
いち ハア。

津村、部屋の外へ。
いち、見送りの忘れ茫然としている。

(OL)

20 赤電話の前

バアーの女らしいのが電話をかけている。
SE——街の雑音。

そのそばで電話帳を繰っている津村。
電話帳「くの部」津村の指が「楠」の項を一つ一つ確かめてゆく。
杉並に「楠」の姓が五軒ある。
女、去る。

津村、受話機をとりダイヤルをまわす。

津村 ああ、もしもし……楠さんのお宅でございますか？ ……奥様の朝子さまは御在宅でいらつしやいませうか？ え、ハマ子様？ どうも失礼いたしました。
電話を切る。また掛ける。切る。

——そして四度目。

津村 もしもし……奥様は、朝子さまはいらつしやいませうか？ え、居らつしやる……

思わず息をのむ)あ、私、松方商事の津村と申す者でございますが……奥様に一寸……。
津村、緊張してネクタイの結び目をゆるめ、待つ。

津村 あ、奥様ですか……私、津村です、実は……ほんの短い間、お目にかかつてお話を承りたい件があるのですが、……お時間をお割き下さいますでしょうか？ いえ、保険ではございません……。(額の汗をぬぐう)

受話器。

若い女ののびのびとした明るい声 ハア、何の御用か存じませんけれど……今日は一日家に居りますから どうぞ……お待ち申し上げておりますわ。

津村、ホツとする。

(OL)

21 楠家の応接室

絨氈の上に転がる毛糸の玉。

朝子、赤ン坊の靴下を編みながら、明るく喋しゃべっている。

朝子 こんなことしながらで御免あそばせ……あのうそれで……御用事と仰つしやいますのは失礼ですけど……ご縁談のお話しじゃございません？

津村 縁談と申しますと？

朝子 あら、御免なさい、違いました？ まあどうしまししょう、あたし……いえ実は主人の妹がまだお嫁入り前なんです。それでちよくちよくそんなお話があるもんですから、……さつきのお電話で、あたしてつきり……。

津村 その方も、是非又お願い致しましょう……実は以前お実家のほうに下宿していた柳田謙一君のことなんです……。

朝子 柳田……？(さっと顔色が変わる)

SE——奥で電話のベル。

津村 率直にお話し致しますが……柳田君は今、大へん苦しい立場に立たされているのです。それであなたに是非、彼の味方になって頂きたいのです。

朝子 味方……と仰っしゃいますと？

女中、ノックして現われる。

女中 奥様、アノ……新宿の奥さまからお電話でございます。

朝子、無言で会釈して立って行く。

——間——

津村、気持を落着かせようと、立上って室内を見まわす。民芸風のコレクションを飾ったガラス棚の上に、見ざる、云わざる、聞かざる、の土偶。

——津村、ひよいと手を伸ばして「云わざる」を掴み、後ろを向かせ、その頭をポンと叩く。

朝子、戻って来る。前とは一変して、凍り付いたような無表情。立ったまま死魚のような視線を津村に向ける。

津村 お母さまからのお電話ですか？

朝子 ……。

津村 それでは、あらまはしはお聞きになったでしょうが……(短い間) どうなさいまし

た？

朝子、ふらふらと戸口に立つ。

朝子 お帰り下さい……。

津村 (睨むように見て) 私は今、一会社の試験委員としてお話ししているではありません……一人の青年を闇に葬るか、救い出すか、その全責任が、私の肩にかかっているんです！ 本当のことを仰っしゃって下さい。

朝子 (低く、呻くように) 津村さん、あなたは……他人の倖せを……家庭を、こわしにいらしたんですか(苦しそうに) あなたは……なぜそんなに、あの人の世話をおやきになるんです。

津村 さあ、なぜだか……一言で云えば好きなんです。彼の中にある何かを魅き付ける。

朝子 どうぞ……もう何も仰っしゃらないで！

津村 一つだけお伺がいたしたいのです。あなたは、謙一君と恋愛関係にあったのですか？

朝子 (首を横に) ……。

津村 失礼ですが……あなたは謙一君をお嫌いになって今の御主人と婚約されたのでしょうか。

朝子 (かすかに) ち、違います……。

津村 最愛の女性を奪われた謙一君の怒りが四月十五日の夜に爆発した……、そう想像してもよろしいでしょうか？

朝子 ……違います。津村さん……あなたは、何も御存じない……何も。
津村 え？ ほかに何か有るんですか……何です？ 一たい、何なんです。

津村の燃える眼が朝子の目の前三寸に迫る――
朝子の乾いた視線、唇をきゅつと噛んで一語も洩らさじと必死の形相。

――間――

朝子 (しずかに) 津村さん……。

朝子の視線が、絨氈の上に。

編みかけの赤ン坊の靴下。

津村は凝視し、朝子は号泣する。

津村、諦めると同時に無性に腹が立って来る。

津村 あなたはどうしても御自分の幸福だけを守ろうとなさるんですか。よろしい。……私があなたのご主人にお目にかかりに来ないとお決めになるのは、虫が良いというものですよ。

津村、憤然と出て行く。

朝子、動かない。

F・O

F・I

22 会議室の扉

権威を誇示するいかめしき。

23 会議室

本橋総務部長と栗本人事課長は着席している。

本橋 何かね。その重大問題というのは……。

栗本 (勿体つけて) まア合格者が決ってからにしましょう。

高梨に続いて石田、福永の三常務が入って来る。

石田 (会話の続き) あれはストライク、内角低目ぎりぎり絶対のストライクだよ。

福永 君のゼスチャーも自信なさそうやったで。

石田 僕は如何なる場合だつて、絶対の確信を以ってジャッジしてるんだ。

本橋 石田さん、何をもめてるんですか？

福永 この間の社内対抗で、この人ミスジャッジをやりおったんや。

石田 負け將軍のひがみさ。

南田専務、入って来る。

南田 (習慣的に) やあ、御苦労さん……。では始めよう。(見まわして) 津村君が居らんねえ。

栗本 (困って) はあ……実は……。

南田 よろしい。……詮衡の基準は今更云うまでもなく、人材を採ることです。その判断は総て吾々の双肩にかかっていると云うと大げさだが……人を選ぶということは大変なことだと思ふ。受験者本人にとっては勿論のこと、会社の貿易という性質から云つても一人々々の社員が工場に譬えれば製作機械も同じで、利益を直接生みだす生産単位……ということになる。従つて、今日の詮衡の当否が十年後には何千ドル、何万ドル、い

やもつと大きな差となつて現れて、社運の消長に影響するわけです……。では充分筋を通し、お互いに納得するまでディスカッションして決めたいと思います。……一つ、宣敷く……。

この挨拶の途中で、津村が入って来る。

暗い顔だが、きびしい決意が漲っている。

一礼して末席に掛ける。

栗本 ではレントゲン再検査の結果が参っておりますので、お手元の表を一寸お直し下さい。286番の川口洋太郎君、これは既往症がかなりはつきり出ておりますので、まず不
合格に入るんじゃないかと思われます……。石田常務、如何でしょうか。

石田 仕方ないだろうね……。専務の云う通り一つ筋を通そうじゃないか。

本橋 どういうお知合ですか？

石田 いやいいんだ。栗本君、そのレントゲン写真、後で取寄せといて呉れ給え、紹介者にも納得して貰わんけりや恨まれるからね。

栗本 はい。

本橋 残念ですなあ、(石田にこなし)素直ない子ですがねえ。

石田 いや、人から人へ、だいぶん手垢のついたコネなんだ。

福永 道理であんたにしちゃ簡単に引退りよると思つた……。

石田 (ちらりと南田を見て)筋を通してるだけさ。

栗本 では最切から参りましょう。25番の吉村清二君。

高梨 (目を閉じたまま)誰の知合い？

南田 君、一々それを云うのは、よそうじゃないか、要は……。

高梨 ……人物をとること。賛成ですな。

福永 (機先を制する如く)合格やね、感じもええし、何や純粋なコリーみたいな精悍な処が気に入つたわ。血統書つきや。

津村 ちよつと語学が落ちるようですが……。

福永 なあに、英語が金を儲けてくれるわけやあらへん。

南田 合格だね。

本橋 異議なし。

石田 異議なし。

高梨 同じく。

栗本 (名簿へチェックする)

栗本。

栗本 次390番、牧野静男君……。社長の甥御です。

福永。

福永 ずばり、仕様がないでっしやろ。

24 名簿

名前の上に合、否のチェックがされて行く。

25 会議室

栗本 以上で、丁度定員なんですけれど441番の柳田謙一が残っています。

石田 気を付け給えよ、いくら推せん者が無いからって……。

栗本 失礼しました。柳田謙一君……。

南田 例の顔の傷だね。

本橋 そうです……。

石田 一寸、難物だね。

福永 ここらで打切ったらどうやねん。

津村 打切ると仰っしゃいますと？

福永 締切りちうもんがあるやないか、請負でも入札でも……。

津村 つまり、それは最初からこの柳田謙一を落とすことで解決がつくと云うお考えが

……。

石田 憶測が過ぎるぜ、業務次長。

福永 いや、なかなか穿った意見や。

本橋 しかし、そのために予備面接をやったんですから、やったものには矢張りそれだ

けの優先権は……。

津村 では、この試験は初めっから……。

本橋 そうじゃないよ。結果としてたまたまそういう結果が出ただけさ。

高梨 まだ、出ちやおらんよ。

津村、高梨に感謝の瞳。

石田 確かに解禁になってからの鳴には余り魅力はないがね。

津村 お止め下さい！

一同、津村を見る。

本橋 君、先刻から少し言葉が過ぎやせんか。

南田 いや、みんな試験委員としては同等の資格だよ。

栗本 (津村をチラリと見て) 何分にも前途ある青年のことでございますので必要なければと、差控えておりましたが……実は……津村さん、いいですね。

津村 ……。

栗本 柳田謙一に関する興信所の再調査報告が参っております。どうぞ、専務から御被見願います。

再調査報告書が高梨を通過って南田へ。

その文面。

26 街頭(新聞社の前)

掲示板の新聞。

謙一がじつと見ている。

27 会議室

調書は石田が読んでいる。

福永 こりやもう、決定的やな。

南田 (腕を組んで無言)

高梨 仕方あるまいね。

福永 高梨弁護士遂に辞退す、か。

石田 これや、ひどい……。 (と置く)

栗本 では、不合格に御異議ありませんか。

南田 (うなづく)

津村 待つて下さい。この調査内容に疑問があります！

栗本 疑問……と云いますと？

津村 (立上る) この調査にある雑貨屋のおかみの証言から見ても……被害者の父親が在宅していたことは明らかです。しかも、ガラス戸一枚で通りに面している店先です。

そんな状況下で、わざわざ女にあやしげな振舞いに出る青年がいるでしょうか。

石田 しかし、事実、その娘も怪我をし自分もチャンとあややって額にその証明を残しとるんだからね。

津村 むろん、私も、事実無根だとは思っておりません。その、三十三年四月十五日の夜、柳田謙一が何らかの過失を犯したことは略々明白だと思えます……ですが、或いは、ガラスケースでも引っくり返えして、自分も傷つき、相手も怪我させた程度のことかも知れないと思うのです。

本橋 なぜ？ 近所のかみさんは、二人のみあう音をはっきり聞いたと云ってるんだぜ。

津村 そうです。はっきり聞いています。そして、柳田が親爺さんに突き出されるのを見た……確認しているのはそれだけなんです。あとはその二つを結びつけて、婦女暴行

を想像しているだけだと思われまます。

福永、成程、こら名推理や。

津村 実は、私、会社に対し柳田の推せん者として責任を感じましたし、俯に落ちない点もありましたので今、被害者の婦人とその家族に会って来た処です。

福永 ほう、再々調査やな。

本橋 それで?!

津村 その婦人も両親も、記載されているような事実はなかったと言っておりまます。

福永 (頓狂に笑い) ハハハ、御苦労なこっちゃ……津村君、うちの娘が乱暴されました。……あたし暴行されましたわ……。と云いよる人間がどこに居ります。

津村 それはそうかも知れません。だからと云って、柳田が暴行を働いたと云う証拠にもならないと思えますが……。

南田 で、何と云ってるんだね、その娘さんは？……暴行でなくて……。

津村 (苦しく) はい、それが……それが判れば……。

南田 ……。

石田 なんだ、判らんのかい。

津村 それ以上は、唯、聞いてくれるな、の一点張りで……。しかし、何かあります。(もどかしく) 何か隠されていることは間違いありません。

高梨 困るねえ、何かあるだけじゃ……。

本橋 津村君、君は一体何を云わんとしてるんだね。

津村 (口ごもり) 主観的な想像ですから……。 (南田の方を見る)

南 田 構わん、云って見給え。

津 村 額の傷には関係ないとしても、彼は、とにかく事実として、猛火の中へ飛び込んで子供の命を救っています。……人命救助と暴行傷害、一方で人を助けながら、一方で人を傷つける……そこに何かしっくりしない、水と油をお感じにはなりませんか。

石 田 馬鹿々々しい。どっちもカツとならなきゃやれんことだ。つまりこの柳田某が激情型の人間だと云う立派な証拠じゃないか。

高 梨 石田君、人命救助が、カアツとなっただけでやれるかねえ。

石 田 一種の条件反射……反射運動だよ。

高 梨 (鋭く) 条件反射?!

石 田 条件反射でなければ、じゃ何だろうね。三文小説なら、尊き人間愛とでも云う処だろうがね。

本 橋 一種のヒロイズムも手伝うでしょうね。

高 梨 ヒロイズム? 君、……君にどうしてそれが判る!

一同、高梨を見る。

本 橋 ……?

津 村 仮に反射運動だとしても、……そういう反射運動を起こすには、矢張り常日頃の心構えが物を云うンじゃ無いでしょうか。

福 永 甘い甘い。そんな手に乗ったらあかん。吾々商売する者に同情が一番禁物や、現にこの男、顔の傷を人命救助にすりかえよったやないか。

津 村 あれば、しかし。

石 田 高梨君も津村君も、人命救助って言葉に酔ってるんだ。……だから、あの傷と人命救助をくつつけたりする、とんでもない過ちをおかすんだ。

高 梨 ……。(半ば独白で) この気持は誰にも判らん。

栗 本 ほう、高梨さん、そう云う御経験でも?

高 梨 ……。(間)

南 田 どうするね? この男を入れるか落すか、答は二つに一つしかないんだからね。
本 橋 (呟くように) 他にも片親で、傷があつて、家庭事情もよくない。

津 村 語学は群を抜いています。
高 梨 片親だとか顔の傷とかは、本質的には問題にならんとする。

戸口まで行った川端が、扉の外と何か連絡して紙片を受け取って戻り、津村に手渡す。

津村、凝視。

南 田 (おもたく) ここいらで、採決とするかね。挙手がいい? それとも、起立? では、柳田謙一君の入社に賛成の者は起立を……。

高梨一人が、すこし躊躇しながら立とうとする。

津 村 専務! お待ち下さい。今、ここに……(紙片をかざし) 私に面会人があります。さつき会ってきた……楠朝子、例の傷害事件の被害者です。

南 田 葉屋の娘さんだね?

福 永 何や知らんが、そんな外のゴタゴタを社内に持ち込んで……脱線も大ていにしないな。

石田 その女と津村君の個人的会見は自由だが……採決を終わってからにしたまえ。
高梨 いや、是非、採決の前に会わせるべきだ。それも僕らの責任の一部だと思う。
南田 津村君、行って来たまえ。(立って)三十分間、議事を休憩します。

南田、云い終ると、スタスタと重役室に入ってしまった。

津村、目礼して廊下へ出て行く。

一同、思い思いの表情で目送する。

28 応接室

カーテンで区切られた狭い部屋。

SE——ビル内の雑音や人声。

緊張して待つ朝子、青ざめてはいるが決意が頬をひきしめている。

間——

津村が入って来る。

津村 やあ、先程は……。

朝子 (思いつめた語調で) 柳田さんの入社は、どうになりましたでしょうか？

津村 いま、会議は休憩です。(注意ぶかく見詰める——)

朝子 (すぐるように) 見込みはあるのでしょうか。

津村 私も頑張るだけは頑張ってます。

朝子 わたくし。わたくし。

テーブルのふちを朝子の指がピクピク蠕動している。

朝子 何もかも……お話ししようと思って……。

津村 (きっぱり) いや、もうそれはおやめ下さい……さっきは私も感情的になって……ご主人にお会いして云々などと、それであなたをここへ誘導したとなると……立派な脅迫罪ですからね。

朝子 (鋭く) そうなんです！

津村 ええ？

朝子 わたくし、主人に会うと仰っしゃったあなたの御言葉が恐しくて……それで伺ったので……ございます……。

津村 ですから、それならば、もう決して……。

朝子 いいえ！ 家を出る時は……自動車の中でも……たしかにそうでした……。ただ主人にだけは会わないで欲しいと、……それだけをお願いする覚悟でした。……でも、今は違います！ 津村さん、あたし、……謙一さんを見たいんです。

津村 ……。

朝子 あの人……ぼんやり立ってました。

津村 話しをしたんですか。

朝子 いいえ、ひと目だけで……(突っ伏す) あたくし悪い女でした……(顔を上げる) 眼がキラキラ光る——津村さん！ 謙一さんは、……私の命を救ってくれたのです！ その為に怪俄をなされたんです……あの方は被害者で、わたくしが加害者なんです！

津村 (思わず腰を上げ) 何ですって……。

朝子 謙一さんはわたしが自殺しようとするのを、とめて呉れたんです……。

津村 ……。(じつと見つめる)

朝子 (ひきつった声で、しぼり出すように) あの晩あたしは、……外出の帰りに近道したばかりに……。

朝子の乾いた眼に――

(OL)

29 まっくらな道

M――ブリッジ。

遠くに灯影が見える。道の両わきは、原っぱらしい。

SE――近づいて遠くなる自動車の響。暗い、かなり長い時間――

カメラ、パンすると――そこに立つ、まっ白な朝子の顔。頬に泥、ブラウスが無残に引き裂かれて、右腕にひどい負傷、ひと目で、それとわかる姿――ふらふらと、虚脱したように歩いて行く。

30 オリオン堂薬局の前

しんと静まっている。

カメラ、パンして――

31 同裏口

朝子、影のように現れて、吸い込まれるように入って行く。

32 同台所

障子をあける朝子――無表情。

33 同廊下

すうつと夢遊病者のように行く朝子。

奥の部屋に、卓袱台ちやくぶだいの酒肴をそばに、酔って転うたた寝している倉吉の姿が見える。まっすぐに薬局の方へ行く朝子。

34 店、薬室の中

朝子、入って来て、硬ばった手でテーブルの抽出しから鍵を取り出す。その時、卓上の小型の秤が腕に触れてカタンと床に落ちる。

朝子、「注意」の貼り紙のある劇薬のケースのガラス戸をひらき、五百グラム入り青酸ソーダ瓶を掴む。

35 廊下

奥の間で寝返りを打つ倉吉。

階段を降りて来る謙一、ちよつと奥を覗いてから、小首をかしげ、店のほうへ――

36 薬室の中

朝子の掌。

その上に、白い粉末。

朝子、嚙もうとする。

朝子さん。

朝子、振り向く。

謙一が立っている。

朝子、手を背後にかくす。

一 朝子さん、どうしたんです？ その恰好は……。

朝子 ……。

謙一 お母さん、心配して、誠一君と駄まで行きましたよ……。

朝子 ……おそいわ。(凄惨な歪んだ表情)

謙一 (ハッと直感して、息をのんで立つ)

朝子、掌を口へ。

謙一、無言で飛びかかって叩き落とそうとする。

朝子、身をひるがえして、薬室の外へ。

37 店先と土間

外へ出ようと土間へ飛び降りる朝子。

追いつがる謙一。烈しく争う。

そこらの品物が落ち散る。

朝子 はなして下さい！ 後生ですから……。

謙一 駄目だ……静かになさい……。

朝子 謙一さん！

謙一 朝子さん！

38 店の前

ガラス戸にびったり身を寄せ、耳をそば立てている安部光子。

怖れと好奇に燃える眼――

SE――中の物音。

39 店の中

なおも揉み合う二人、朝子が突き放すはずみに、謙一の足がすべって、もろに、大きなガラスケースの中に頭を突っ込む。

SE――すさまじい物音。

朝子の悲鳴。

(OL)

40

応接室

黙って向き合っている朝子と津村。やや永い沈黙――

SE――隣室の会話。(妙にナマナマしく聞こえる)

津村 (何とも言葉が無くて) ……で、その時の痴漢は、そのまま？

朝子 (乾いた声) ……一人じゃなかったんです……。

津村 (ますます何も云えなくなる)

朝子 あたしに何が云えたでしょう……謙一さんの好意に甘える以外には……あたし、さつき謙一さんの姿を見て、やっと……決心がつかしました。あたしを証人に立てて下さい。謙一さんの無実の……今なら出来ます！ けれど……(目を伏せ) ……何もかも、の勇氣は出ませんの……。

津村 (深く頷く) ……。

朝子 ……自殺しかけた私を謙一さんが……それくらいなら私、云えます！ 云わして下さい！ ……。

間――

津村 (頭を垂れ) 謙一君に代って礼を云います。(腕時計を見て) 多分、御厚意だけを頂く結果になるでしょうが、万一の場合は……。

朝子 はい。

二人、見つめ合う。

津村 では、ここでお待ち下さい。

津村、新たな斗志にあふれ、大胆に出て行く。

朝子、いちどに疲労が出て、がっくりと椅子の背にもたれる。

(F・O)

F・I

41 会議室

津村(タイト) いま報告を終わったところ、ハンカチで額の汗をぬぐう。

津村 以上で御諒解を願えたことと思います……。柳田謙一君は、本来ならば警視総監賞を二度受けて然るべき人物なのです。それが無責任な調査、無責任な噂、無責任な観察のために、暴行傷害まで背負わされようとしていたのです。いや、一人の女性の名誉のために自らあまんじてその十字架を背おって来たのです。この忍耐！ この自己犠牲！ この勇氣！ 本社の将来を背負うに、これ以上の人材が又と有るでしょうか！ どうぞ、御再考をお願いします。

津村、着席。

南田、高梨、石田、福永、本橋、それぞれの反応。

福永 (石田の肱を小突き) ねちこい奴やなあ……とうとうものにしおった……。

津村 証人は面会室に待機しております……御希望ならば呼んで参りましょう。

南田 (はじめて口を開く) 人権の侵害だ。その必要はない。

石田 わしは、併し、採否の争点は一向に解決されておらんと思うねえ、貿易会社は道徳教育の場じゃないんだから……自己犠牲だとか忍耐だとか……小説くさいセンチメンタリズムだけで……。

本橋 (我が意を得たりと) 賛成です！

石田 兎に角、あの顔と傷と警察にとられた調書、これは、理由の如何を問わず、信用を第一とする貿易会社には致命傷だと思ふね。

津村 (やや興奮して) 示談解決した事件の調書は、年度末に焼却されてる筈です。法的にも社会的にもその時に消去したと見てやるべきだと思います。

福永 ほう、君はそっちの方も仲々くわしいやないか。

本橋 昔、何かあったんじゃないのか。

津村 ……。

石田 よろしい。仮に君の主張を入れてこの傷害事件は全くの過失だったとしよう。しかし、残った傷はどうする。

津村 人間は誰でも、多かれ少なかれ過去の傷跡を持っています……ただそれが表面に見えてるか、隠されているかだけの違いです。ただ、柳田の場合、顔という……氷山の一角に刻み込まれ、吾々の場合は水面下に隠されているだけの違いです。……併し人間の真実はもっと意外に深い、心の奥底に、潜んでいるんじゃないでしょうか。

石田 しかし、傷は傷として、ちゃんとここに残ってるんだ! (自分の額を切って見せる) それをどうするんだとわしは聞いているのだ。

津村 柳田が若し、あの傷のために入社を拒こばめるとしたら、それは試験に落ちるだけではなくて……人生から、人間から落ちるのです。……一人の青年の一生を闇の中へ突き落すんです!

——間——

傷跡だけを攻める前に、愛情をもって彼のいい面も取上げてやって頂きたいと思います。

石田 それは……僕に対する皮肉かね。

津村 違います。……私は、過去におかした過失のために、一生苦しみ続けている男を

知っています。その男も、柳田と同じように世間のつまらぬ噂のために、自分をあざむき、世間をあざむき通して来ました。私には柳田の過失が人ごととは思えないのです。

福永 なんやあんたのことかいな……。

津村 ……その男は、親友と鴨猟に行つて、水に落ちて溺れかかった。……親友が銃を突き出して、つかまれと叫んだ。……(瞑目) 男は夢中でつかまった……。

SE——銃声。

津村 その手が……引金にかかったのです。男は警察に呼ばれ、世間は恩人を殺した人非人と罵り、……過失だ、いや故意だ、女のとり合いからの計画殺人だ……と凡ゆるデマが飛び、……いや、事実、その親友は恋愛上のライバルでもあったのです。……それを殺した。この手にかけて……洗っても、しごいても、この指にしみついた硝煙の匂いは落ちはしないのです。

——間——

福永 なんやね……それ位いのことが。事業かて、恋愛かて……この世知辛い世の中に、人を押しよしのけんで何が出来るんや。万々一、あんたがその引き金をかけた時にやな……なにかが心に閃いたとしてもそれが何んや?……そのために、悩み続けているなんて馬鹿げた話や。

高梨 福永君! 言葉をつつしみたまえ、誰でも傷跡にさわられたくはないんだ……。問題は愛情だ。

福永 愛情?! わての一番嫌いな言葉や。

高梨 嫌いでも何でも、その愛情が人の命を救うんだ。

津村 私の傷は一生消えない傷です。その痛みから逃げようとも思いません。だが、柳田君のは違います。人並に扱われれば……採用されさえすれば消えてゆく傷跡です。……私のつぐないの総てをかけてお願いします。

南田 (天井を睨んでいる)

石田、福永、高梨、石田。

石田の声 ……あの女が死んだのを、おれのせいだとも云うのか……違う、違う！……掻爬で死ぬなんて百人に一人もいるかいなかなんだ。ありや医者者の責任だ。医者者の責任だ。

福永。

福永の声 フン、あてが破産しかけた時にどうや、兄貴でもない、弟でもない知らん顔をしくさって……今更、己れが困ったさかい云うて金借してくれて何や……フン……あては知らん……知らへんで！

高梨。

高梨の声 ……あの空襲の晩……俺はむせかえる煙の中で倒れていたんだ。布団の下敷きになって……だが布団だと思っただのは……二つの黒いむくろだった……俺はあとで聞いたんだ。パパが来ない、パパが来ないって、止めるのもきかず火の中へ引返して行った女房と四つになったばかりのルリ子の話を……。ルリ子！

南田。

南田 (目を閉じて何かに抗うように耐えている)

本橋 如何でしょう？ 時間も予定より超過いたしましたし……最後の裁定は、専務にお願いすることにしては……？

石田 賛成。

南田 ……津村君、まかせてくれるかね。

津村 はい……お願いします。

南田 熟慮してみても、私も信念を以て裁定することを誓おう。

栗本 南田を先頭に、重役達ぞろぞろ去って行く。

栗本 それでは、これをもちまして……今日の会議は解散いたします。人事部の不慣れな為いろいろな議事の進行に不手際がございました点を、深くお詫びいたします。

本橋 君、誰も居やしないよ。

本橋も出て行く。

42 会議室の俯瞰

栗本、片付けて出て行く。

無人。

灯りが消され、ブラインドを通して入って来る戸外の光りだけとなる。

43 業務部

津村が、機嫌のいい顔で自宅に電話している。

津村 ああ治子？ 仕事も定時で済みそうだからね、ウン、晩の支度は？ そうか、そ

れなら食事に出て来ないか、洋一も美穂も連れて来るさ……。五時半、西銀座の入り口がいいね……。うむ。(切る)

女の子一 (紙片の山を区分けしながら) 次長さん、入社試験のほう、決まりました？

津村 どうやらね……。

女の子二 ハンサムな子、いるかなア。

津村 サンフランシスコ・ジャイアンツのようには行かないさ……。ほう！ こういうものを作るとなると、実に勤勉だね、君たちは……。(笑いながら) あ、応接室に人が待たせてあったんだっけ。

津村、廊下へ。

44 応接間

しんとして、誰もいない。

津村、廊下からのぞき、入って来る。

しばらく立って待っている。

――間――

不審の表情で考えているが、ハツと思いついて、廊下へ出て受験者控室のほうへ。

45 控室

腰かけたり、歩いたり、話したりして発表を待っている十六人の学生たち。

津村、入口からのぞき謙一に目くばせする。

謙一、外へ出る。

46 廊下

津村と謙一。

津村 君だね、朝子さんを帰したのは？

謙一 そうです……。いくら自分の意志で来たからって、あんまり残酷だと思いましたから。

津村 その点は……。あやまるよ。(微笑) 帰してよかった……。もう証人の必要は無くなっただ。

謙一 (目が輝く)

人事部長が一枚のタイプ刷りを持ってやって来て津村に黙礼、控え室に入る。

津村、ほらというふうには謙一を押す。

謙一、室内へ。

津村、目立たぬように立ったまま。

47 控室

緊張する学生たち。

人事部長 ええと……。正式の入社通知は二、三日うちに郵送しますが……。これから名前を呼ぶ人は、人事部に行って誓約書に署名して下さい。

中谷 何の誓約書ですか？

部員 採用決定後は他の会社への横すべりはしないと云う誓約です。こりや本社の慣習でね。……吉村君……（答える声——）大山君……（同じく）牧野……。…（続く）

48 廊下

佇む津村、だんだん表情が険しくなる。（室内で名前を呼ぶ声、答える声続く——）
「学生たち、呼ばれた順に、津村の前を通過して人事部のほうへ。」
終る。しんとする。
津村のぞく。

49 控室

ひとり残されて伏眼に立っている謙一。
それを見ないようにして、人事部員、紙片を取り廊下へ出る。

50 廊下

人事部員、通り過ぎようとする。

津村 君、ちよつと。

部員 ハア？

津村 それ……。

津村、タイプ刷りを受取り、見る。

51 その紙面

連名の中に、やはり柳田の名前は見当らない。

「津村、無言で紙を返す、部員、去る。」

津村、動かない。

——間——

謙一、出て来る。

謙一 （しずかに）いろいろ……有難うございました。（云い捨てて去ろうとする）

津村 （つよく）柳田君！

謙一 （振り向く）

津村 ロビーで待ってて呉れ給え。

津村、大股に重役室のほうへ去る。ホロウして。

52 廊下

M——高潮。

歩く津村。

ホロウ。

53 廊下

ぐんぐん歩く津村。すれ違う社員、怪訝に振り返る。

54 洗面所の前

棒雑巾を押しているつぎと同僚。
津村、歩いて来る。つぎ、にこにここと笑って最敬礼。
黙念と歩く津村。

55 重役室の前

M——コード。
津村、ノックする。
若い女秘書が顔を出す。
津村、中へ入る。

56 重役室

窓のビル街の落日を背景に、正面デスクに掛ける南田専務。
S E ———遠くパレードのブラスバンドが聞こえてくる——
津村、まっすぐに南田の前へ、女秘書は衝立の陰へ。
南田（微笑）津村君か、今君に電話していたところだ。まア掛け給え。
津村（立ったまま）私は……専務を信じていました。いや……信じたいと思って、やって来ました。
南田 どうか、そう願いたいものだね。
津村 柳田が落ちた理由は何ンでしょうか。

南田 まあかけたまえ。（悠然と）第一に、片親、それと、家庭の状況……。

津村 （ふるえ声）それから？

南田 顔の傷。

津村 ですから、あれは……。

南田 （きびしく）傷は傷だ。理由の如何を問わない、一々証明書を見せてから、人に接するわけにはゆかんのだからね。

津村 では、では……（詰まって）さっきの会議は……いったい何の為にやったのですよるか。

南田 あれはあれで充分参考になった。私は専務としての立場から信念をもって裁決してつもりだ……。やかましいな。

南田、立上って背後の窓をしめる。

それでもパレードは聞えて来る。

南田と津村。

南田 会社が何故採用試験をやるか、君は考えてみたことがあるかね。

津村 有能な人材を集める為でしょう。

南田 そうだ、有能な人材を集めて、会社の利益を上げるためだ。……いいかえれば、会社はこれらの新しい社員に投資をするわけだ。投資の計算、これが採用試験の……全部とは云わないが、根本なのだ、判るね？

津村 ……。

南田 君の推薦する柳田君と他の連中とどちらが会社により多くの利益をもたらして呉

れるか。私は判定のポイントをそこへ置いた……間違っていると思うかね。

津村 恐らく間違つてはおりませう。併し目の前の利益ばかりでなく……。

南田 まあ聞きたまえ……銀行の頭取の息子のほうが、少々仕事のできる男よりも、会社にとってには確かにプラスになるんだ。……私は専務として会社に少しでも多くの利益をもたらし、株主により多くの配当を分配し、二千人の社員に給料を支払ってその生活を保証する義務がある……。

津村 (何か云おうとする)

南田 津村君……(咽喉を抑え) ここまで出かかっている言葉でも、専務としては云えない場合がある。……組織あつての個人で、個人あつての組織じゃないんだからね。君も幹部の一員であるからは、この点があくまで混同しないようにして呉れ給えよ。

津村 ……。

南田 (抑えて) 君はわしを憎み、軽蔑するかも知れん……それも重々承知の上だ。誰かが入れば、誰かが落ちねばならん。その時わしに出来ることは何か……柳田という学生に恨まれ、そして君に甘んじて軽蔑されてやることだけだ……(足を組み) これが……就職試験を裁定する者のギリギリ決着、最後の良心だとわしは思う。

——間——

津村 わかりました。

津村、一礼して行こうとする。

南田 (やさしく。だが釘をさすように) 今までと同じようにやって呉れるね。

津村 (かすれ声) ハイ……。

津村、出て行く。

57 廊下

津村、歩いてくる。

58 洗面所

棒雑巾を押しているつぎと同僚。

津村、ずかずかと寄る。

津村 柳田さん……。

つぎ 次長さん……(お辞儀——) ほんとにどうも……助かりましたです。お蔭様で……謙一の……アノ事は嘘だったのでしよう?

津村 (うなずく) 謙一君は、立派な青年です!

つぎ ああ!……ああ! (あふれる歓喜)

津村 (頭を垂れ) 済みません、謙一君、不合格でした……。

つぎ えっ? (棒立ち)

津村 私の、無力からです。

——間——

つぎ、洗面所に走り込みうづくまる。

その背中が次第に激しく大きく波うって来る。

津村、入るに入れず、もういちど深く頭を下げて歩き出す。

59 業務部

パレードの興奮は最高潮に達している。

60 ロビー

隅に、ぼつんと掛けている謙一。

津村、来る。目が合う。

津村、かすかに首を横に振る。

謙一 (うなづく。)

津村 柳田君……。

謙一 いいんです……ぼくはただあなたにお礼を云う為に、待っていたんです。

二人、並んでエレベーターのほうへ。

津村、ボタンを押す。

ドアがひらく。二人乗る。

61 エレベーターの中

津村と柳田、大勢の中で肩を押し合って立っている。

津村の目のすぐ前に柳田の悲痛な顔がある。

62 ビルの前と路上

いっぱいの人。散りみだれる紙吹雪。

群衆の肩ごしに動くパレードの豪華な車の列。

津村と謙一、ビルから出て来て、人波の背後を、それぞれの孤独さで歩いて行く。

津村 私の家族と……夕飯をつき合って呉れないかね？

謙一 (微笑) 慰めの言葉なら……いりません……。有難うございました……。

謙一、途中で言葉を切り、一礼して反対の方角へ歩き去る。

津村ちよっと目送りして、やや俯向き加減に歩き出す。そして人波に消える……。

SEE。パレードのブラスバンドと歓声華やかに、高まって。

(終)